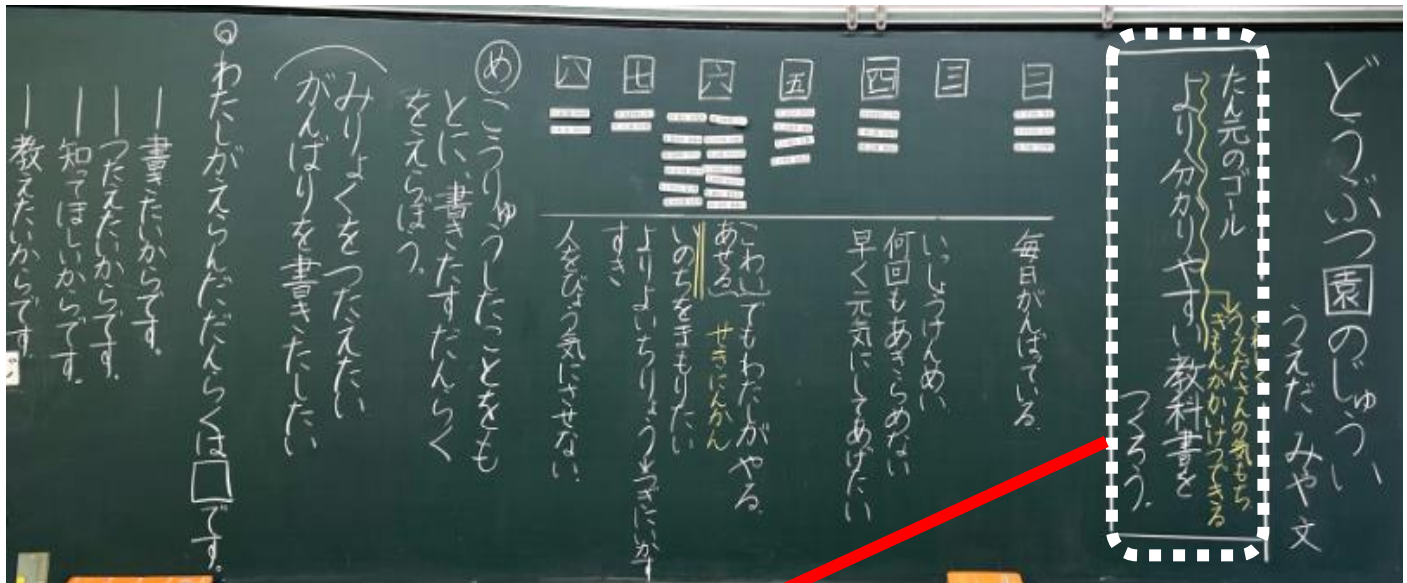




教材の特性×言語活動

昨年度の取組み「筆者への手紙を書く」活動での反省点として、当事者意識が抜けどこか他人事として書く児童があり、教材の特性を生かしきれていないのではないかとあった。そこで考えた言語活動である。「どうぶつ園のじゅうい」には筆者である植田さんの「動物に対する気持ち」が顕著に表れている。行間にある上田さんの心情を書き足すことでより豊かに場面を想像し、筆者の熱に触れることができる。

⇒児童が自分事として考え取り組むためには何ができるかと考えることは国語の授業づくりに必須。今回の教科書に書き足す活動以外にもレポートや新聞など媒体は他にも考えられるが、それらが子どもたちから発信されると理想。

読み手の視点、書き手の視点

「どうぶつ園のじゅうい」において、植田さんは登場人物であり、筆者。

植田さんはこのとき何を思っていた？→読み手の視点
植田さんはなぜこの順番にしたのか？→書き手の視点
今回は読み手の視点と書き手の視点どちらも混在していた。視点を統一するとなおよびがチャレンジ精神が◎。

「インタビューに答える植田さん」という設定の学習活動も可能。Q&A方式で考えを形成し、編集者として書き手の立場でまとめていく。

説明文の読解

単元の序盤は文章を大きく読む活動。(ひろげる)
2次で各段落を細かく読むような活動。(ふかめる)
3次でそれを踏まえた文章全体を俯瞰して読む活動を設定するとよい。(まとめる)
各駅停車の縦切り授業は安全だがつらい。
新幹線の「のぞみ」のように大きな区間で横切りの授業を進めていきたい。
そこで今回の「一番思いが伝わるのはどこ？」のような活動は単元の序盤に出してもよかったかもしれない。
ただ、昨年度の「一番大変だと思う仕事は？」という発問よりもポジティブな言葉で児童の思考を広げるような言葉にしたことが、考えのずれを生むことにつながった。

言語活動の在り方

言語活動は、実生活ではめったに体験することができないような場面を切り取り、授業で仮の場として行うといい。

児童がもっと〇〇したい！という考えを教科書の編集者や筆者などに伝えることを許容する環境、思考づくりを目指す。

⇒児童の学ぶ意欲を高めるワクワクする言語活動につながる。